

明治七年台湾出兵史料について

—在台北国立中央図書館台湾分館の収蔵物評価—

ロバート・エスキルドセン

序

二〇〇〇年三月在台北国立中央図書館台湾分館を訪ね、明治七年における日本の台湾出兵に関する所蔵物の史料調査を行った。本報告書において、調査結果を提供すると共に、発見した史料が日本に存在する台湾出兵に関する出版物及び公文書などにどのように関係しているかを説明する。まず国立中央図書館所蔵の史料に関して概要を述べ、そして明治七年南台湾で起きた事件に関する小生の研究に係わる国立中央図書館所蔵の項目数点について説明する。

I 図書館の歴史及び明治七年台湾出兵に関する史料の概要

A 図書館の歴史について

日本の台湾植民地政権時代、台湾総督府は図書館、博物館、大学を始めとしていくつかの機関施設を建てた。終戦時、こうした施設は台湾により接収され、一九四九年の中国本土における共産党革命後、中華民国の機関施設となった。国立中央図書館の正式名称「国立中央図書館台湾分館」は、国民党政府は全中国を代表すると共に当国立中央図書館は全

中国の中央図書館の一分館にすぎないとする国民党政権の立場を反映するものである。旧植民地時代のそれぞれの機関の所蔵物の中には終戦時以降に紛失した項目がいくつかあるが、大方がそのまま保存されている。国立中央図書館の場合、もともと日本語資料である、いわゆる「日文台湾資料」のほとんどが総督府図書館の所蔵物であった。現在、国立中央図書館の使用している日本語資料関係の目録は、植民地時代と同じシステムで継承されており、図書館員の一人高碧烈氏は植民地時代から現在に至るまで在職してずっと日本語資料関係の担当者である。

B 台湾出兵に関する史料の概要

まず始めに、どんな史料が国立中央図書館に所蔵されているかを調べる際に立つ目録が数点ある。総督府図書館に収蔵された書物を知るには、大正十四年発行の『臺灣總督府圖書館和漢圖書分類目録（臺灣の部）』を使用できる。台湾出兵に関する項目の大半がその歴史に関するセクションに載っている。次に、国立中央図書館所蔵の日本語資料の目録である『国立中央図書館台湾分館日文台湾資料目録』（一九八〇年）は総督府図書館の目録と類似した構成になっているが、紛失した題名のほとんどが削除されている。但し、紛失しているにも拘わらず目録に掲

載されている項目も多少あるので、正確さに欠けているところも多少ある。

昭和七年に総督府図書館は台湾出兵に関する展覧会を主催し、展示項目の目録『明治七年征臺役關係資料展覧目録』（以降「展覧目録」）を発行した。十六頁からなるこの小冊子には展覧会で展示された五九項目が掲載され、その多くが総督府図書館からのものである。展覧会で展示された項目の中で、総督府図書館からのものは「展覧目録」に図書館の整理番号が付けられており、その整理番号のほとんどが現在まで国立中央図書館で用いられている。「展覧目録」に項目ごとに短い説明が記載されている。多くの場合、項目の内容、刊行物または草稿や写しであるか、さらに項目が図書館に寄贈されるに至った経緯などについて説明している。項目は総督府図書館から来ない場合、その所蔵者が誰であるかが示されている。

「展覧目録」は台湾出兵に係わる項目を特定するのに有益な出典であるが、最も興味深い項目の中には紛失したものがいくつもある。とりわけ、「展覧目録」に載っている錦絵と写真の全て並びに地図の点数はもはや失われている。こうした項目はもとも図書館の所蔵品であったが、高氏によれば、錦絵など大型の項目は終戦以降何度も行われた図書館の移転の過程で行方不明になった。これは、錦絵の中にはその題名からして、日本の図書館や美術館などの所蔵品のなかに残っている錦絵とは異なるものがあつたと考えられるので、非常に惜しいことである。行方不明になっている地図も同じく他には存在していないものであると考えられる。

「展覧目録」によれば、図書館所蔵の重要な項目のいくつかは水野遼の家族の寄贈になっている。明治七年当時海軍省通訳者水野は、それぞれ第一代及び第二代の台湾総督となる樺山資紀および児玉利国などと共

に、台湾探査のために遠征隊の派遣に先駆けて台湾に派遣された日本人の一人である。水野は明治七年台湾南部地方で台湾先住民との戦闘に参加したが、彼は自分の体験記を残しており、その草稿は国立中央図書館に保存されている。水野は、明治二八年台湾が日本の植民地となった後台湾に戻り、総督府に仕え、死去するまで台湾と親しい関係を保った。

II 国立中央図書館所蔵の台湾出兵に関する史料

今回の国立中央図書館所蔵日本語史料の調査は、「展覧目録」に記載されている項目のうちどれが現存しているかを確認すると共に、他に台湾出兵に関する史料があるかどうかを調べることを目的とした。「展覧目録」に記載されている項目は、次のように分類できる、A刊行本、B草稿や写した史料、C地図および錦絵類、D書簡。

A 刊行本

「展覧目録」には三十三点の刊行本が記載されており、全ては日本の図書館などに存在している。そのうち九冊は、明治時代に出版された日本の出版物なので、マイクロフィルムになっている。田代幹夫著『臺灣軍記』や東條保著『臺灣事略』などがよく知られている例である。五冊は、英語又はフランス語での外国の出版物であり、一八六〇年代および一八七〇年代に出版されている。一例として E.H. House 著 *The Japanese Expedition To Formosa* がある。九冊は、大正時代もしくは昭和初期に出版されたもので、藤崎濟之助著『臺灣史と樺山大将』および合泰藏著『明治七年生蕃討伐回顧録』がその例である。

B 草稿及び写した史料

「展覧目録」には九つの草稿や写本が掲載されている。その中には植民地時代に日本の図書館や史料館所蔵の項目からの写本もあり、水野遼の個人所蔵だったものもある。国立中央図書館所蔵物の中にはこれらの

「展観目録」に記載されている写本のほとんどがまだ現存しているが、昭和七年の展覧会では展示されなかった重要な写本も含まれる。

昭和七年に展示された写本や草稿のうち、三点が水野遵の家族によって総督府図書館に寄贈されたものである。それらは、①『征蕃私記稿本』、②『臺灣地誌草稿』、③『明治七年地方事務日誌』である。最初の二点は水野が書いたもので、三点目は明治七年台湾に設立された速征隊の地方事務局が処理した事柄を記録した書類からなる記録書またはその記録書の写しである。『征蕃私記稿本』は水野の明治一二年に書いた回顧録であり、『大路水野遵先生』に刊行されているが、後者の二点は刊行されていないので、これらの項目については以下にⅢ章で評価する。総督府図書館所蔵物には『征蕃紀勳』の写本が入っていたが、紛失している。『征蕃紀勳』は、依田学海が水野の日記の台湾出兵に関する記述を改訂して漢文で書いたものである。

これ以外、昭和七年展覧会で展示された写本のうちの二点及び展示されなかった国立中央図書館に現在所蔵されている一点は、台湾出兵に関する重要な史料である。国立中央図書館には、遠征隊のあらゆる事柄を監督する明治七年設立された政府機関である蕃地事務局が収集した台湾出兵に関する史料からなる小冊十四点の『處蕃提要』が所蔵されている。原本は早稲田大学の大隈文書に所蔵されており、マイクロフィルムにもなっている。『展観目録』には総督府図書館の『處蕃提要』の入手先についての説明は記載されていないが、いわゆる台湾総督府史料編纂会からのものである可能性が高い。総督府史料編纂会の役割は、もう一つ昭和七年に展示された写本であった『樺山資紀日記』の由来から分かる。総督府史料編纂会は『樺山資紀日記』の写本を展覧会に貸し出している。藤崎濟之助は、彼の著作『臺灣史と樺山大將』のための研究調査の際、『樺山日記』の写本を手に入れるにあたり総督府史料編纂会の世

話になったと記している。藤崎によれば、写本は総督府の東京事務所で作られて総督府史料編纂会に送られたものであるとなっている¹⁾。但し、国立中央図書館にある写本は総督府や総督府史料編纂会の用紙には写されていない。台湾総督府史料編纂会が所蔵していた『樺山日記』の写本は恐らく『西郷都督と樺山総督』の中で『樺山資紀臺灣記事』として刊行された日記の基となったものであると考えられる。三点目の写本である『處蕃類纂』は、『處蕃提要』と『樺山日記』とは異なって昭和七年の展覧会に展示されなかった。『處蕃類纂』は昭和十九年に総督府から総督府図書館に寄贈されたものであることが中表紙の図書館の印鑑から分かるが、写本はいつできたか、またその寄贈の理由やタイミングなどについては詳細がない。但し、台湾総督府の用紙に写されたことは確かである。『處蕃類纂』は極めて貴重な文書の集積で、恐らく大隈文書からの写本であると思われる。この写本をⅢ章で評価する。

「展観目録」にはその他、写本三点が含まれており、その全てがまだ国立中央図書館に現存している。『支那一件二付他邦往復竝管下達及雜書』は長崎で写された台湾出兵に関する文書から構成されている。この写本は、戦前長崎県立図書館所蔵の原書から作成されたものである。『明治七年臺灣蕃地御處分ノ際傭夫卒死亡調』と題する写本は、台湾もしくは長崎で死去した台湾出兵に係わる勤労者一覧である。この写本は戦前長崎県立図書館所蔵の一覧から作成されたものである。最後に『臺灣始末』は主に外国の資料から編纂された台湾出兵に関する新聞やその他の記事から構成されている。これは戦前沖繩県立図書館が所蔵していたもとの二五巻のうち八巻からなる同じ表題の写しである。

C 地図及びその他の所蔵品

「展観目録」には多数の地図、錦絵、およびその他の所蔵品が記載さ

れている。数多くの項目は、個人の所蔵者から貸し出されたか或いは紛失しているがために、国立中央図書館の所蔵には入っていない。「展観目録」には総督府図書館時代の所蔵物であった四点の地図や地図集が記載されているが、うち二点が国立中央図書館に現存している。その一つは、『開拓使舊藏臺灣地圖』という表題で目録に載っている四点から構成されている地図集である。この四点の地図は台湾出兵時代のもので、後に開拓使に送られたものである。「展観目録」には、この地図がどういう経緯で北海道に送られたか説明されていないが、明治政府が台湾出兵時代にこれらを作成し、大正時代の末或いは昭和初期に函館図書館から台湾総督府図書館に寄贈されたものであるとの説明が載っている。この地図集の一点は大型の台湾全島の地図で、明治政府に雇用されたりジェンドルが雇われる前に発行された地図に類似している。もう一点は台湾島周辺の海域を調査したもので、岩石の位置や水深を示しており、これはこの海域に立ち寄ろうとする遠征隊に係わる船長にとっては不可欠のものである。三点目と四点目は社寮湾および台湾南部の石版画の地図で、これらは珍しい例であり、Ⅲ章で説明する。その他に現存している地図は「北部臺灣地圖」である。これはリジエンドルによる手書きの地図で、水野遵の家族が総督府図書館に寄贈したものである。これについてもⅢ章で述べる。

「展観目録」には台湾出兵に関する錦絵が数点入っている上に、総督府図書館の目録には展示されなかった錦絵が他にも数点記載されている。総督府図書館の美術品が戦後台湾省立博物館に数点移管されたが、錦絵はその中に入っていない。国立中央図書館の目録には今でも数点の錦絵が掲載されているが、全て紛失している。

「展観目録」には、その他の物品が多数記載されている。例えば、①一八七一年漂流して台湾南部で殺害された琉球人の追悼のために建てら

れた記念碑に関する書物や巻物、②遠征隊や南部台湾地域の写真が載った書物、③明治七年南部台湾の先住民に与えた日章旗、④日本兵の飯盒などがある。総督府図書館の目録には、昭和七年の展覧会では展示されなかった遠征隊の写真二点が掲載されており、これらは遠征隊の指導者であった西郷従道の家族によって寄贈されたものである。台湾省立博物館は西郷家が寄贈した二点の写真の複製写真を作成しており、また大正・昭和初期からの刊行本の中でも複製して使用されている。しかし、国立中央図書館が所蔵していた写真の原画は紛失している。現在、台湾省立博物館所蔵になっている日章旗は歴史的に最も興味深い物品である。水野の回顧録である『征蕃私記』に遠征隊の指導者が先住民に日章旗を渡したことについて述べており、そして藤崎濟之助は水野の記録に基づいて同じ説明を繰り返している。落合泰藏も同じ説明を提供し、出典を示してはいないが、これも水野の記録に基づいていなくてはなからうか。当博物館所蔵の日章旗に記入されている文章や番号はこれらの書物に記載されているのと一致している。

D 書簡

「展観目録」には五点の書簡が掲載されているが、そのうちの一点は個人所蔵から貸し出されたものである。残りの四点のうち、三点は国立中央図書館に現存している。最も貴重な西郷従道が野津鎮雄に宛てた明治七年九月七日付の書簡と水野遵が友人に宛てた同年六月の書簡の二点が『西郷都督と樺山總督』に写真複製されて掲載されている。

Ⅲ 国立中央図書館所蔵の台湾出兵に関する史料の評価

国立中央図書館所蔵の日本語史料の調査から、日本には存在していない台湾出兵に関する貴重な史料が多数収められていることが判明する。最も貴重な所蔵品は、A 水野遵が以前保持していた草稿と写本数点、B

『處蕃類纂』の写本、C数点の地図である。

A 水野遵の写本と草稿

1 『臺灣地誌草稿』

手書きの草稿である『臺灣地誌草稿』は、『明治七年地方事務日誌』や『處蕃類纂』ほど役に立つ史料ではないが、台湾出兵当時、明治政府、とりわけ海軍省は台湾に関してどのような情報を収集し、またどのような情報が重要で、必要性があると考えていたかを証明する史料である。

国立中央図書館が所蔵している『臺灣地誌草稿』は海軍省用紙に写された一巻の小冊子である。もともとの草稿はいつ書かれたか、まただれが書いたかは不明だが、出兵のすべての出来事は過去のこととして説明されているので明治八年以降書かれたものと思われる。水野遵が樺山資紀と一緒に南台湾へ旅行した際の経験について多少書かれていることから、水野は少なくとも草稿の一部を書いたことは推測できる。表紙には「上」と表示されているので、現在一巻しか残っていないが、もともと二巻以上が存在したに違いない。現存している「上」の一巻は台湾島の歴史や地理を簡単に説明し、つづいて台湾西部の農業、資源、兵力、政治的組織などについて説明している。しかし一ヶ所は南台湾の先住民に関して簡単に述べ、その地方の人々については後の「蕃地之部」で詳しく説明すると注がつけられている。「上」の一巻には「蕃地之部」はないので、その「蕃地之部」は紛失した巻に含まれていると思われる。他の巻は元来存在していた可能性が高いが、水野遵の息子が昭和六年『臺灣地誌草稿』を総督府図書館に寄贈した時点では一巻しかなかった。

2 『明治七年地方事務日誌』

『明治七年地方事務日誌』、とりわけその第一巻は貴重な史料である。第一巻は台湾出兵の指導者たちが明治七年五月台湾南部に設立した地方事務局の記録帳である。遠征隊は台湾で明治七年五月中旬から十二月初

旬までの七ヶ月を過ごし、その間の記録がもとも存在していたはずであるが、水野の息子は昭和六年総督府図書館に二巻のみ（五月分と十一月分）を寄贈している。寄贈する時点より前に他の月に關する記録は既に失われていたものと思われるが、水野は明治十二年に完了した『征蕃私記』に遠征隊の指導者が日章旗を渡した酋長の名前と社名など、記憶からだけでは記述できない詳細な事柄を説明しているもので、その情報から『明治七年地方事務日誌』から採った可能性が高い。従って、その他に数巻が少なくとも明治一二年まで恐らく存在していた。

『明治七年地方事務日誌』の第一巻は五月の記録で、主に台湾南部の中国系の住民や先住民との交渉についての記録である。中国系の住民との交渉の記録は漢文で書かれ、一方先住民との交渉の記録は日本語で書かれている。前者は主に福島九成の行った交渉の記録であり、後者は遠征隊に同行した米国海軍士官ダグラス・カッセルが英語で書いた報告書の翻訳である。交渉の記録の仕方が異なっていることからすれば、他の資料が示唆しているように仕事の分担があったことが確認できる。つまり、中国系の住民との交渉は日本人が担当し、先住民との交渉は米国人が担当した。『明治七年地方事務日誌』の十一月分の第二巻は、日本兵が日本に向けて台湾を發つ準備をするにあたり遠征隊の責任者西郷従道が作成した様々な文書や公告を記録したものである。これらの文書は史料集などに刊行されているので、この巻は第一巻ほど新鮮な情報は含まれていない。

B 『處蕃類纂』

『處蕃類纂』は台湾出兵に関する極めて貴重な史料である。十巻の小冊からなり、三九〇点の様々な長さのある書類が収められている。例えば、第一巻は長文の覚書六点からなり、第八巻は九八点の書簡集である。十巻のうちの何巻かは既に刊行されている文書を含んでいるが、他では

見ることのできない文書もたくさん入っている巻もある。特に第七巻と第八巻は、今まで刊行されたことがなく且つ日本では見ることのできない文書が数多く収められている。台湾にいる遠征隊の指導者と東京や長崎の政府関係者との間で交わされた書簡の写しが収められているこの二冊は、遠征隊が台湾で行った活動について他では入手することのできない非常に貴重な情報を得ることのできる史料集である。台湾出兵に関する西郷従道の書簡は数点しか残っていないので、第八巻に収められている西郷が大隈重信に宛てた数多くの書簡によって台湾出兵に対して西郷が述べたことを吟味する前例のない機会を得ることができる。第七巻に入っている数点の文書のなかには、既に『西郷都督と樺山総督』に刊行されている部分もあるけれども、それ以外の文書から台湾出兵の組織および目的についての貴重な情報を得ることができる。

国立中央図書館にある『處蕃類纂』はどれから複写したものか明らかでないが、原書は早稲田大学の大隈文書に収められていたはずである。

「展覧目録」は総督府図書館の『處蕃提要』の写本が早稲田大学にある原書から写されたものであると説明されているので、『處蕃類纂』も出所は同じである可能性が高い。国立中央図書館所蔵の『處蕃類纂』は総督府の用紙に写されているので、もともと総督府図書館用に作成されたものではなく、むしろ『樺山資紀日記』の写しと同じく台湾総督府史料編纂会用に作成されたものであると思われる。

国立中央図書館所蔵の『處蕃類纂』は一時大隈文書に収められていた史料の一部であるに違いない。明治八年六月大隈重信が三条実美に宛てた報告書によれば、蕃地事務局はその存続十四ヶ月間に台湾出兵に関する数百点に及ぶ書物や書類を収集すると共に編纂したとされている。蕃地事務局は台湾出兵に関する最も重要な書類をおおまかな順序で十四冊の『處蕃提要』に編纂したが、その他の数多くの書類を整理する余裕は

なかったと大隈は三條に告げ、そして整理されていない書類は十六の分類に分けられた一〇一巻からなる『處蕃類纂』に収められたとも告げている。⁽²⁾『處蕃類纂』は戦後に発行された『大隈文書目録』には掲載されておらず、失われたようだ。国立中央図書館所蔵の『處蕃類纂』は十巻だけしかないので、九十巻以上が永遠に失われた可能性がある。

C 台湾地図

1 『開拓使旧蔵台湾地図』

国立中央図書館には開拓使から受け継いだ台湾の地図が四点ある。そのうちの二点について以下に述べる。

① 『社寮湾』

『社寮湾』(Sialiao Anchorage)と表題がつけられた石版画は、明治七年遠征隊が上陸した社寮湾を取り巻く山々が描かれ、地図というよりむしろ風景画である。遠征隊の使用する船の停泊する港の目印となる景色を描いたものであると思われる。図の上部に社寮湾の風景が描かれ、下部には湾の説明が右側に日本語で左側に英語でそれぞれ書かれている。説明文は一八七二年三月二日にダグラス・カッセルが旅した時の情報に基づくものであり、山々を描いた絵は、リジエンドルが同月日台湾南部を訪れた際に撮影した写真を基にして描いたものである。従って、この絵はカッセルがリジエンドルに同行していたことを証明するものであり、この書類によってこの二人は台湾出兵が始まる前から接触があったことを示すものであり、明治七年リジエンドルがなぜ明治政府にカッセルの雇用を勧めたか説明がつく。

② 『台湾南部の圖』

『台湾南部の圖』はリジエンドルが台湾南部に関して提供した情報に基づく石版地図である。この地図は台湾出兵が始まる以前の段階で台湾南部の地理に関して明治政府が知り得た最良の知識であったことを表し

ているが、山々や先住民の村落の存在位置は驚くほど不正確である。これはこの地域に関するリジェンドルの知識の限界を示すものである。外交文書によれば、米国が日本に派遣した公使チャールス・デロングは明治五年十月に副島種臣外務卿にリジェンドルの台湾の地図並びに写真を見せた。³⁾リジェンドル文書には多数の写真が残存しているが、地図は少ない。国立中央図書館所蔵『開拓使旧蔵地図』から、台湾出兵の起源であるこの副島とデロングの面会の際に副島はどのような地図を見たか、また明治政府の責任者はリジェンドルから台湾の地形や地理に関してどの程度の知識を得たかを知ることができる。

2 『北部台湾地図』

『北部台湾地図』は昭和六年水野遵の子息によって総督府図書館に寄贈された手書きの地図である。図書館の目録には内容を伝える日本語の題名が載っているが、地図自体はリジェンドルの母国語であるフランス語で「CARTE de la partie Nord Est de l'île de FORMOSE TAIWAN jointe a mon rapport de decembre 1868」という表題になっている。地図の説明文にはチャールス・リジェンドルの名前があり、その表題からは、この地図はリジェンドルが米国国務省に提出した台湾報告書と共に提出された地図のコピーであることが分かる。地名のほとんどがフランス語で書かれており、なかには中国語で書かれた地名もある。日本人に簡単に読めるようにフランス語の名称に日本語の注解をつけてある。明治五年リジェンドルは恐らくこの地図を副島にも見せたであろう。地図が水野遵の所有になったという事実から、樺山資紀または樺山と同伴した水野は明治六年の台湾北部を探索した際にこの地図を持っていったことが推測できる。

IV 結論

国立中央図書館所蔵の台湾出兵に関する日本語の資料には未刊行のものや日本の図書館や史料館にはない重要な項目が数点含まれている。こうした珍しい項目は明治七年に台湾で何が起きたかについて貴重な情報を提供するものであり、出兵の目的や方法を歴史的見地から理解する上で役に立つ。従来、日本や外国の歴史家が使用した台湾における遠征隊の活動を説明する史料は、ほとんど全てが新聞記事や E.H. House 著 *The Japanese Expedition to Taiwan*、またはリジェントル文書や大隈文書に収められている遠征隊に同行したアメリカ人士官ダグラス・カッセル及びジェームズ・ワツソンの著になる書簡などである。こうした史料はいくら役に立っても欠けているところがある。つまり、こうした史料はアメリカ人の手によるもので、日本の立場を十分に説明していない。水野遵の回顧録『征蕃私記』は日本人による重要な情報源であるが、これは歴史家によってほとんど使用されていない。

国立中央図書館所蔵の史料によって台湾への遠征隊の台湾現地における活動を掘り下げて吟味することができるようになり、遠征隊が行った活動についての数多くの基本的な事実を確認することができる。例えば、この史料における日本軍と先住民との大きな戦いについての記述は他の史料と一致しているが、この史料によってさらに掘り下げ、もっと鮮明に理解することができる。また、台湾南部の先住民に対して遠征隊の指導者がどのように対応したかについてより多くの興味深い説明を知ることが出来る。さらに、遠征隊に参加した日本人の先住民の見方はアメリカ人の参加者の見方とはかなり異なっており、台湾南部を占領するにあたり日本人の態度がアメリカ人の態度よりはるかに攻撃的であったことがうかがえる。例えば、この史料では、日本人は儒教的見地から先住民

を見る傾向が見られるのにくらべて、アメリカ人は先住民にたいして軽蔑的な呼び方を使つてはいるが、少なくともある程度に平等主義的な考え方も表れている。この史料によって東京にいる首脳がいかにして台湾にいる軍首脳を管理しようとしたかについて調べることができ、他の史料では見れない台湾における日本人の意図を表面的にしか捉えていないので、この史料は、台湾で実際何が起こったか、また遠征隊が達成しようとしていたのは何だったのかについて、他の史料からは分からない充実した説明を提供するものである。

〔註〕

- (1) 藤崎濟之助著『臺灣史と樺山大將』（國史刊行會、昭和一年）、十二頁、十三頁。
- (2) 「蕃地事務局編纂書目竝編纂方針具狀書」、大隈文書A二〇九。
- (3) 外務省調査部編纂『大日本外交文書』（日本國際協會發行、昭和十四年）、第七卷五頁。

参考文献

- 臺灣總督府圖書館編『明治七年征臺役關係資料展觀目錄』（臺灣總督府圖書館、昭和七年）
- 国立中央図書館台湾分館編『国立中央図書館台湾分館日文台湾資料目錄』（国立中央図書館台湾分館、一九八〇年）
- 臺灣總督府圖書館編『臺灣總督府圖書館和漢圖書分類目錄（臺灣の部）』（臺灣總督府圖書館、大正十四年）
- 西郷都督樺山總督記念事業出版委員會編『西郷都督と樺山總督』（西郷都督樺山總督記念事業出版委員會、昭和十一年）
- 藤崎濟之助著『臺灣史と樺山大將』（國史刊行會、昭和一年）
- 大路会編『大路水野遵先生』（大路会事務所、昭和五年）
- Edward Howard House, *The Japanese Expedition to Formosa* (Tokio: [s. n.]

1875)
Charles W. Legendre, "Letterbooks, Correspondence, and Memoranda," Library of Congress, Manuscript Division (「リンデンマン文書」)